opusdei.org

属人区長の書簡 (2010年6月)

属人区長は今月の書簡において、6月のいくつかの祝日について語ります。

2010/06/10

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

私たちが日々キリストに招かれている聖体のいけにえは、私たちを過ぎ越しの神秘の核心に導き入れます。 ミサ聖祭を捧げる、あるいはミサ聖 祭に与る度に、キリストが十字架上で成し遂げられた最高の愛の行為に参与します。キリストはそれを目指してこの世でお過ごしになったのせした。しかし、ミサ聖祭においてキリストを通して神へ捧げる礼拝と感謝、償いと祈願が、特別に際立つ時や状況があります。

この偉大なたまものに対する喜びと神への感謝は、私たちが日々表書で出たる。 神への感謝は、私たちが日々表書でとれたちが日々表のです。しかし、私たちの祝って、独自とこれから祝う祭日とこれから祝う祭日とこれがられるのもとだけでは、もいうは、ものは、のもないの様々な側面との親密を担かれ、同時に特別の恩恵が与えられるからです。

使徒言行録にあるように、初代教会 において聖霊は、聖霊降臨の日に、 激しい風として、また、炎のような 舌として現れ、十二使徒の上に降って、彼らをたまもので満たし、イカンで表し、私は平和をある」[i]といるで表し、私の平和を与える」[i]になりません。主は、聖霊の来臨をといる人を入れる人々におけるような形で表すことを入々におけるを表直に受け入れる人々においます。

激しい風という表現の中に、とてつ もなく大きな障害物を払いのける神 の力を見出すことができます。ま た、度々環境を汚染するスモッグを 追い払う新鮮な空気を思い起こすこ ともできます。ベネディクト十六世 は象徴的なこの表現を次のように解 説しておられます。「きれいな空気 を吸うことがどれほど大事なことか を思い起こさせてくれます。それ は、肺で吸う物理的な意味での空気 であっても、心で吸う霊的な意味で の空気であっても同じです。この霊

に救いをもたらす空気が、愛で す。| [ii] 炎のような舌は、人々の 心を愛で燃え立たせたいと熱望して おられる神の愛について語ります。 この炎は「集まっていた使徒たちの 上に降り、彼らを燃え立たせて、あ らためて神の温かさを伝えました。 こうして、イエスの『私が来たの は、地上に火を投ずるためである。 その火がすでに燃えていたらと、ど んなに願っていることか』(ルカ 12,49) というみことばが実現しま す。使徒たちは、様々な社会層の信 者たちと共に、この神の火を地の果 てまで届け、人類に一つの光り輝く 道を開いたのでした。こうして、そ の火で地の面を新たにしようとお望 みの神に協力したのです。| [iii]

最後の晩餐の高間で聖母を中心に集まっていた使徒たちに起こったように、私たちが聖霊の働きかけにより敏感になるため絶えずとりなしてくださっている聖母に、感謝しましょ

う。特に、五月に頂いた諸々の良い ことや、子どもとしての真実な深い 愛情で聖母を称えようと努めたこと を考えています。さらに具体的に は、イエスとの親密さを保つよう招 かれたことに心を留めています。

他方、先週日曜日の三位一体の祭日 は、私たちの思いと心が真の喜びの あるところに留まるようにという新 たな招きでした。御父、御子、聖霊 ともども、宇宙を満たす唯一の神が 恩恵によって私たちの心にお住まい になり、最終的に天国の栄光のうち にあるご自分の命に与らせようとお 望みなのです。この祭日に先立つ 日々に、どのようにTrisagio Angélico(三位一体への祈り)を唱 えたでしょうか。三位一体を永遠に 誉め称えている天使の替美に合わせ て唱えたでしょうか。そして、神の 各ペルソナを切り離すことなく、区 別して付き合う努力をその後も続け ているでしょうか。

一つのエピソードをお話ししたいと 思います。聖十字架ローマン・カ レッジにあるパドレのお聖堂には、 大理石の天蓋があります。その正面 の部分に、BENEDICTA SIT SANCTA TRINITAS ATOUE INDIVISA UNITAS と彫られていまし た。まだ工事中であったのですが、 聖ホセマリアは、しばしばここを訪 れました。その頃、ほとんど視力を 失っておられた聖ホセマリアは、こ の章句をそらんじておられたにも関 わらず、訪れるたびに、私たちを祈 りへ招くために、何と書いてありま すかと尋ねられたのです。私たちの 人生が三位一体の唯一の神を替美す

今、キリストの聖体とイエスの聖心の祭日を準備をしています。この二つのお祝い日には密接な関係があります。それは、日付が近いからだけではなく、いずれの祭日も、神が人類に大いなる喜びをお与えになった

るものでありますように!

ことを記念するものだからです。 「御託身に始まり、救い主としてこ

の世でのご生活から十字架における この上ない犠牲に至るイエス・キリ ストにおいて神の愛が顕れました。 ところが十字架上では、その神の愛 が新たなしるしをもって示されたの です。『その時、一人の兵士が、槍 で、御脇腹を突いたので、すぐ、血 と水とが流れ出た』(ヨハネ 19,34)。イエスの水と御血、それは 愛ゆえに全てを成し遂げるまで(ヨ ハネ19.30) 、最後の最後まで身を挺 した主の奉献を物語っています。| [iv]

6月11日の聖心の祭日で司祭年が幕を下ろします。司祭職への召し出し、司祭と全てのキリスト者の聖性のために祈り続け、他の人々にもそうするように働きかけましょう。この一年間、倍加するよう努めたこの嘆願が、私たちの心から決して消え失せることの無いようにと主に願い

ます。また司祭職の素晴らしさを攻撃する人々の口を閉ざしてくださるようにも願います。

数日前、信者の崇敬のために公開さ れている聖骸布の前で祈るためにト リノまで巡礼に行きました。私たち のために主がどれほどお苦しみに なったかを強く感じることができま した。ヨハネ・パウロ二世はこう話 されました。「聖骸布は福音書を映 し出す鏡です。事実、この聖なる布 について考えると、この布に浮かび 上がっている姿が、イエスのご受難 とご死去について語る福音書と非常 に深く関わっていることを考えずに はおられません。心こまやかな全て の人は、この布を眺めて内的に深い 印象を受け、心動かされます。| [v]

旅行をするときはいつもそうであるように、皆と共にそこを訪れ、聖骸布を崇敬し、聖霊の火で私たちの心を焼き尽くしてくださるよう主にお

願いしました。トリノへの巡礼からう帰られたベネディクト十六世は市はにての聖なるれました。「この聖な高心できるした。キリスト教信のできるもり戻す。とれば、キリスを取ぜならそれは、キリストの体へと導き、なし、トの体へと導き、あり立ても、ない、トの体へと導きでありたもの神秘を観想するよう駆りです。」[vi]

神を見、イエス・キリストのみ顔を眺め、神の栄光のうちに永遠がこれの人が心をしたがれた気付いての奥深を立る。全ないと、創立者がられたのです。創立者がられた望みです。望しておいるがはながった望みではいる人たちは、会うように努

めます。恋人同士は相手のことしか

目に入りません。当然のことではな いでしょうか。人の心とは必ずこの ように感じるものです。私にとっ て、イエス・キリストの御顔を眺め る熱望を否定することは、嘘をつく ことになります。『Vultum tuum. Domine, requiram (詩編27,8)、主 よ、私は御顔を尋ね求めます。』| 特に晩年にはこう加えておられまし た。「目を閉じて、神がお望みの時 に、鏡におぼろに映るようにではな く、顔と顔を合わせて…(1コリン ト13,12) 主を仰ぐことのできるとき のことを考えるとわくわくします。 子供たちよ、確かに『私の心は神 に、生ける神に渇いている。いつ神 のみ前に出て、神のみ顔を仰ぐこと ができるのか』(詩編42,3)。」 [vii]

私たちもこの望みを育みましょう。 それには、ご聖櫃に現存され、また 恩恵のうちにある私たちの心にもお 住まいのイエス・キリストを尋ね求

めることです。また、主の神秘体で ある教会の成員のうちにも主を見出 すようにしましょう。特に病人や貧 しい人、信仰ゆえに迫害されている 人たち、世界のあちらこちらで様々 な多くの不正に悩まされている人た ちの中に、主を探し求めましょう。 誰に対しても無関心であってはなり ません。私たち皆が、復活して歴史 の中で働き続けておられるキリスト の御体の部分になるよう招かれてい るのです。「私たちは生きた部分で す。その際、私たち一人ひとりは、 主が委ねようと望まれた職務をもっ て、自分の任務を果たします。| [viii] それは洗礼において主ご自身に 組み込まれることを通して実現され ます。

キリスト者としての存在は、慈しみ 溢れるこの秘跡の深みに根付いてい ます。私たちの聖性と使徒職への招 きは、キリスト・イエスにおいて、 私たちは世の救いのための仲介者で

あると自覚することに具体化されま す。聖ホセマリアの次の言葉が何と 良く理解できることでしょう。「使 徒とは、洗礼によってキリストに接 ぎ木されキリストと一体となり、堅 信によってキリストのために戦う力 が与えられた信者のことであり、ま た信徒の共通祭司職によって、世界 中で行いをもって神に仕えるように 召されたと自覚する信者のことであ ると言えます。信徒の共通祭司職 は、キリストの司祭職にある程度与 りますが、職位的祭司職とは本質的 に異なり、信徒の共通祭司職によっ て信者は教会の典礼に参与し、言葉 と模範、祈りと償いに励み、それに よって神への道を歩む人々を助ける 力を受けるのです。」[ix]

〈司祭年〉の終わりに当たってこの 考察を味わい、個人的な決心を引き 出すようにしましょう。聖ホセマリ アの『鍛』にある考察も役に立つで しょう。「良き種蒔き人キリスト は、麦を手に握るのと同じように子である私たちの一人ひとりを傷ついた御手で握りしめ、御血で浸し、清め、汚れを落とし、酔わせられる。そしてその後で、寛大に一人ひとりを世界中に播かれる。 麦は袋ごとではなく一粒ひとつぶ蒔くのである。」[x]

まず、秘跡を通して「主が私たちを ご自分の御血に浸し、私たちを清 め、汚れを落とし、私たちを酔わせ られる」、こうして私たちを聖性に お導きになります。しかし、それが 成就されるのは、ただ私たちが望 み、私たちをイエスに一致させてく ださる御方、慰め主の働きにお任せ する時だけです。

私たちは、ゆるしの秘跡とご聖体において主の聖なる人間性に触れることを求めなければなりません。主のみ教えを自分のものにすべきですが、そのためには、聖書を読み、教

義的形成を熱心に受け、教義的知識 を深めるだけでは不十分です。それ と共に、祈りにおいて主との誠実な 語り合いを続けることが必要です。 主のみことばが私たちの哀れな自我 の奥深くまで染み通り、私たちの愛 情と望みを潤してくれるよう嘆願す ることです。主が私たちを導いて下 さるように望まなければなりませ ん。つまり、主のように感じ、主の ように理解し、主のように愛するこ とがよりよくできるために、主の足 跡を辿り、その諸徳から学ぶので す。

聖霊の働きかけが私たちにおいて実現すると、というよりも聖霊の働きかけと同時に、主は、種蒔き人ようにがを期待して畝に麦粒を蒔くように「私たちを世界中に播かれる」の心を持つものとして神と人間を結びでき持つものとして神と人間を結びではる存在になります。司祭は更に叙階の秘跡によって位階的祭司職を遂

行することになります。叙階の秘跡によって、司祭は頭キリストによって(in persona Christi Capitis)行動できるようになり、教会の頭であるキリストが典礼の挙行に現存するようになるのです。

主は、オプス・デイにおいて私たち に、キリスト者としての共通の召し 出しの中で、特別な召し出しをお与 えになり、聖ホセマリアが1928年に 受けた精神によって、私たちが主に 仕えるように励ましておられます。 洗礼の霊印という土台の上に、オプ ス・デイへの召し出しという特別な 恩恵を受けた私たちは、人々の救霊 のため、いつもキリストを手伝うよ う駆り立てられます。しかし、それ は私たちが他の人たちより優れてい るからではありません。イエス・キ リストだけが神と人間の唯一の仲介 者[xi]であり、主は私たちがこの仕 事に協力することをお望みなので す。

まず私たちは、ミサ聖祭において、 キリストのいけにえと、信心深く一 致しなければなりません。このよう にご聖体に一致することによって、 私たちは全生活で、神を礼拝し、神 に感謝し、償いを捧げることができ ます。つまり、この世におけるイエ ス・キリストの道具として、私たち の全人格、私たちの全行動を捧げる ことになるのです。創立者が言って おられたように、一日全体を「ミサ 聖祭 にしていくことで、本当に 〈ご聖体の人〉、すなわち、自己の 行い全てにおいて、神なる師の行い を再現しようと努める人となること ができるのです。

こうして初めて私たちは、全ての人が主の贖いの実りを受け取るよう助けることができるようになります。 主の教えを人々に伝え、恩恵の泉である秘跡に近づかせ、そして永遠の命への小道に導くため、私たち自身、日常生活で同じことを実行しつ つ、キリストの道具になるのです。 聖霊の導きのもと、私たちは本当に 主と共に歩むことができるようにな り、聖ホセマリアのあの望みを実現 させることができます。「人々の、 かに命を捧げる。こうしてのみ、イ エス・キリストのご生活を自分の生 活とし、主と一体になることができ る。」[xii]

創立者の帰天記念日が近づいています。これから6月26日までの日々、 創立者の模範と教えとに忠実に従い つつ、私たちもまた主と一つになる までに、キリストのご生活を自分の ものとすることができるように、信 仰をもって創立者の取り次ぎを願い ましょう。

また、その前日は、オプス・デイの 最初の三人の司祭の叙階記念日で す。しっかりとした忠実の模範を残 してくれた方々であり、三人とも常 に〈神のもの〉でした。それゆえ、 引き続き私の祈りと意向に堅く一致 していてください。特に、オプス病 で大に決して欠けることの苦しんな の人たちと様々なことで苦しんである人たちとを頼りにします。 ひみをキリストの十字架に一致さる となるよりなを喜んで捧したで も、その弱さを通して、他のが を支える強力な柱となることができます。 心からの愛情を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2010年6月1日

[i] ヨハネ 14,27

[ii] ベネディクト十六世、2009年5月 31日聖霊降臨の祭日ミサ説教

[iii] ベネディクト十六世、2010年5 月23日聖霊降臨の祭日ミサ説教

[iv] 聖ホセマリア、『知識の香』162

[v] ヨハネ・パウロ二世、1998年5月 24日トリノでの演説

[vi] ベネディクト十六世、2010年5 月5日一般謁見の演説 [vii] 聖ホセマリア、1973年12月25日 説教のメモ

[viii] ベネディクト十六世、2010年5 月5日一般謁見の講話

[ix] 聖ホセマリア、『知識の香』120

[x] 聖ホセマリア、『鍛』894

[xi] 1テモテ 2,5参照

<u>[xii]</u> 聖ホセマリア、『十字架の道 行』第14留

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2010nian-6yue/ (2025/11/21)